



## 退任の挨拶

新潟大学前学長 **長谷川 彰**  
HASEGAWA, Akira

平成20年1月末日をもって任期満了により学長を退任いたしました。退任にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

在任中の最も大きな出来事は、平成16年4月の法人化でありました。厳しい意識改革を迫られる変革でしたが、むしろ、法人化を、従来から営々と築き上げられてきた教育研究実績の上に、環日本海地域においてより大きな存在感をもつ個性輝く大学づくりを行う好機ととらえ、真摯に取り組んでまいりました。皆様のご理解とご協力に感謝しつつ、主な取組を振り返ってみたいと思います。

新しい大学づくりの中で最も重要視してきたのは、いかにして新しい時代にふさわしい人材育成を行うべきかという課題でした。全学教育機構が主導して、総合大学の教育資源を最大限に活かし、分野・水準表示法や副専攻制度を含む新しい学士課程教育システムの構築を進めてきましたが、その根幹は各学部における主専攻プログラムの確立であり、今後とも継続した取組が必要です。この取組が、やがて全国の総合大学の教育モデルとなることを期待しています。

本学では様々な分野で独創的な研究が推進されており、画期的な成果も得られています。21世紀COEプログラムにも選定された脳研究所のさらなる充実をはかるとともに、超域研究機構が牽引役となって他の優れた研究をも支援し、また、研究成果を学内外に向けて発信してきました。近い将来、脳研究所に続く第二、第三の世界的研究拠点が誕生することを期待していますが、それには研究者自身の情熱と努力が不可欠であることは言うまでもありません。

社会展開においては、新潟市等と包括連携協定を締結し、教育、医療、産業等、様々な分野で共同事業を実施し、また、災害復興科学センターは県と連携して中越地震や中越沖地震等による災害復興を支援してきました。知財活動では、知的財産本部を設置して、基本特許などの知的財産の創出、管理、活用に努めてきましたが、長年にわたる基礎科学に関する教育研究の成果が、グローバルな価値を秘めた画期的

な技術開発にむすびついた発明もあり、大学らしい成果が徐々に現れてきました。また、企業との共催による社会連携フォーラムには、地域の方々も多数参加され、地域と大学の共生について教職員や学生とともに率直な意見交換が行われるようになりました。国際展開では、環日本海地域の協定大学と学位授与について協議を進め、学生交流にも新たな道が開かれつつあります。

多くの事業が軌道にのり、次第に成果も得られつつありますが、どの事業においても流動定員や特任教員制度が有効に活かされており、これらの制度により採用された教員が本学に新風を吹き込んでいます。また、これらの事業を側面支援するために、旭町・五十嵐両キャンパスに対して綿密な年次計画のもとで耐震改修を進めてきました。さらに、老朽化設備の更新においても概算要求のマスタープラン枠の中で一定の成果を得ることができました。施設や設備の充実に向けては、今後とも、中長期的な計画を立て、しっかりと取り組んでいただきたいと思います。

経営面で大きな部分をしめる医歯学総合病院は、再開発計画や経営努力が実を結び、平成18年度病床稼働率において国立大学法人附属病院中第一位を達成しましたが、大学病院をとりまく状況は厳しく、今後とも経営努力を継続していただきたいと思います。

教育研究組織の整備については、法人化を機に、法科大学院の設置をはじめとして、新しい学科や研究科の設置が継続して行われてきており、本学は一層均整のとれた大規模総合大学として発展しつつあります。

本学の中期目標・中期計画の達成に向けた取組に対する客観的な評価については、国立大学法人評価委員会による各年度に係る業務の実績に関する評価において、これまで総じて高い評価を得ることができました。これもひとえに、教職員一体となって取り組んでいただいた成果であり、あらためて皆様のご理解とご協力に心より御礼申し上げます。とりわけ、法人移行作業及び法人化にともなう大学改革において、総力上げてご支援いただいた事務局に心より御礼申し上げます。

最後に、次期学長のもとで、さらに新潟大学の存在感がより大きなものとなり、個性が一層輝きを増していくよう祈念して、退任の挨拶といたします。

さらに新潟大学の存在感がより大きなものとなり、個性が一層輝きを増していくよう祈念します。

いかにして  
新しい時代にふさわしい人材育成を行うべきか。  
これを新しい大学づくりの中で  
最も重要視してきました。